

現代社会を見る

イスラームとの共生はなぜ難しいのか ～西欧世界との緊張関係の原因

一橋大学教授

内藤正典

欧米サイドから見たイスラーム

9・11の同時多発テロ事件は、イスラーム世界と西欧世界との関係をたいへん悪化させてしまった。ムスリム（イスラーム教徒）の過激派は、「イスラーム原理主義者」である。彼らは、欧米を敵視し、キリスト教徒を敵視している。欧米人やキリスト教徒の社会を破壊するために、テロを続けている。ウサマ＝ビン＝ラーディンやアル・カーイダというようなテロ組織は、若いムスリムたちを洗脳し、ジハードをよびかけ、若者をテロへと駆り立てている。

ヨーロッパでも、彼らに洗脳された若いムスリムのあいだに、イスラームの教えに従って生きようとするイスラーム主義が浸透している。フランスは500万、ドイツにも300万、イギリスにもおよそ160万のムスリムがいるけれど、彼らのあいだにも、イスラーム原理主義が浸透して、若い女性までがスカーフやヴェールで頭を隠すようになった。なぜ、21世紀のいま、宗教にしがみついで生きようとする人たちが急増しているのだろうか。ヨーロッパでは、宗教は個人の自由で、信じるもよし、信じないもよし。なのに、ムスリムをみると、ひどく閉鎖的にかたまってみえる。こういう現象は、いったいどうして起きているのか？

イスラームからみると

ここでは、こういう問いにやさしく答えていこうと思う。初めにいっておかなければいけないこ

とがある。上記のここ数年の流れは、全部、欧米サイドのみかただが、イスラームからみると違ってみえる。

ムスリムは、初めからキリスト教徒を嫌ってはいない。同じ一神教の兄弟だと思っている。イスラームの聖典コーランでは、イエスもムハンマドより先に神（唯一神アッラー）から人間へのメッセージ（啓示）を預かった人であり、神のメッセージを伝えてできたのがキリスト教だと考える。イエスもマリアもみんな良い人として登場する。ユダヤ教の指導者モーセも同様である。

どちらが嫌ったのかをいえば、先行していた一神教のユダヤ教とキリスト教が、イスラームを嫌ったのである。当然のことだが、先輩の一神教からみれば、7世紀になって新しい一神教が登場すれば、邪教にちがいないと思込む。最初の誤認はそこから出発した。ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムの三つの聖地であるエルサレムが、長い間イスラーム王朝の支配下にあったので、野蛮な異教徒の手から聖地を奪回しようとしたのが、中世ヨーロッパによる十字軍だった。

十字軍以来、キリスト教西洋によるイスラーム敵視は、21世紀のいまでも続いている。敵対の仕方は今では違う。イスラーム原理主義という過激な思想のせいで、若者がテロに走る。アメリカをはじめ西欧諸国は、「テロとの戦い」を世界共通の課題とした。それはよいが、テロ撲滅を図るために、ここ5～6年のあいだに、アフガニスタンとイラクで戦争を起こしてしまった。愚かな行動である。

イスラーム原理主義思想というものは、少し大

胆にいえば、「ない」のである。ムスリムが西欧に対して怒っているのは事実だが、それは、アメリカにせよ、ヨーロッパにせよ、力づくでイスラーム世界を植民地支配したり、勝手に国境線をひいたりして中東を分断したからである。自分たちが過去にしたことを反省せず、「人権」だの「民主主義」だのを外から押しつけるから、よけいに反発される。押しつけるだけならいい。戦争を引き起こし、罪もない多くのムスリム、なかでもイスラームの教えでは戦闘員ではない「女性」「子ども」「高齢者」の三者を無差別に殺戮してきたから、ムスリムの怒りは頂点に達してしまったのである。その先に、テロのような暴力で暴走する若者を増やしてしまった。

彼らは、ビン＝ラーディンやアル・カーイダの宣伝に共感するかもしれない。自分たちの置かれているひどい状況をつくりだした責任の多くは、アメリカやヨーロッパにあるのは確かだからだ。だが、暴力を生み出している原因は、アメリカによる武力行使やヨーロッパが人権や民主主義の先進国として傲慢な態度をとっていることにある。もともと商業的性格の強いムスリムは、およそ戦乱には向かないし、家族の絆をなによりも大切にするので、自爆テロなんて、よほど追い詰められた状況にならないかぎりやらない。

日常生活のなかで

日常生活のなかでヨーロッパ社会は、「蔑視」と「恐怖」がிரிまじった感情でムスリムを追い詰めてしまった。2004年に、フランスでは公立学校の生徒（ムスリムの移民たちが大勢いる）にスカーフ・ヴェール着用を禁止する法律を制定した。フランスでは、憲法で、公的な場所に宗教を持ち込むことが禁止されている。宗教と国を切り離すことを政教分離というが、フランスでは、公的な領域は「世俗的」（宗教から離れていること）でなくてはいけない。そのルールを公立学校に適用したというのがフランス側の言い分。しかし、当

のムスリム女子学生たちが、スカーフで頭を覆うのは、髪の毛に性的な羞恥心を感じているからである。イスラームの教えでは、女性らしさを表わす部分を隠しなさいと教えているだけなので、髪の毛を露出して他人の目にふれるのが嫌ならスカーフで隠そうとするにすぎない。もっとも今さら髪の毛にたいした性的意味はないと思っている女性は、ムスリムであってもスカーフなどしない。

それをイスラーム原理主義のシンボルだの、女性抑圧のシンボルだのと、もっともらしい理屈をつけて禁止したのだが、ばかばかしい話である。スカートの丈を短くしなさいとっているようなもので、国家がムスリムに対してセクハラを行っているのも同然である。私たちが気をつけなくてはいけないのは、ヨーロッパがいつも合理的な判断をするとは限らないということである。とくに、長年にわたって偏見をいじめてきたイスラームが相手となると、フランスに限らず、多くの国で、突拍子もない言いがかりをつける傾向にある。

異文化、とくにイスラームとのつきあい方になると、ヨーロッパやアメリカは、突然、理性的、合理的判断を失うことがあるから地理の学習でも、そのことには注意をはらう必要がある。フランスが、公立学校に宗教をもちこませないのは、カトリック教会が長い間、民衆を支配してきた歴史があり、フランス革命のころから、教会と聖職者が厳しく批判されたからである。政教分離はフランスという国で、個人の自由を獲得するのに大事なはたらきをしたのは確かだ。しかし、それがイスラームにも通用するかというと、そうはいかない。ヨーロッパでは、教会と個人を引き離すことで自由を得られたが、ムスリムは、そもそも教会をもっていない。信仰はもともと個人の問題で、個人が恥ずかしいと思えばスカーフで頭部を隠すだけである。信仰と切り離さないと人間は自由になれないという発想そのものが、ムスリムには理解できないということを知っておかないといけない。